

诗

8

2022

诗与散文(诗)



青身魚

能村 研三

季語「夜の秋」の使い時

俳人協会のホームページの「今日の一句」の句を抽出するのに、毎年戸惑う季語がある。

「今日の一句」はその日の季に合わせて句を選ぶのだが、「夜の秋」の季語は夏なので立秋前の日に句を選ばなければならぬ。

「秋の夜」は秋の季語で、「夜の秋」は夏の季語であることは、俳人にとつては周知のとおりである。

歳時記の解説には「夜の秋」とは、「晩夏、日中はうだるように暑いのに、夜になると、秋の兆しが漂う」「夏の夜に感じる秋の気配という意味であり、秋の夜のことではない」「立秋に先駆けて用いる夏の季語である。古くは「秋の夜」と同じく秋夜をさしたが、近代以降、夏の季語に転じた」とある。

山本健吉著の『基本季語五〇〇選』によれば、「科学的な厳密さをたてまえてしている人たちは、こういう気分を主とした季語にはなじめないのである。『夜の秋』を夏の季語とすれば

曲がるたび風新しく聖五月

一振りに被る手拭ひ草むしる

二階には二階の匂ひ更衣

失ひし時間をおもふ更衣

朴残花高き葉騒を聞いてをり

墨あはき形代にして悔いるかな

酔に殺す青身魚や半夏生

曝されし中に手擦れの和綴本

雛僧の鼻梁てらてら雨安居

降りさうな晴れさうな空樽咲く

こそ面白いのであって、秋の季語だったら何の変てつもないはずだ。温度計の目盛を標準にして言えば不合理だろうが、秋を感じるのは主観であり、気分なのだから、科学的な厳密さよりも、詩人の诗情の上で、この季語は生きていけばよい。」とある。例句には登四郎の次の一句も取り上げられている。

何も言はず妻倚り坐る夜の秋

登四郎

この句について登四郎の自註句集には「子供（長男爽一）の初七日も過ぎた夜。泣いてばかりいた妻も泣かなくなった。只黙って書きものをしている私の近くに坐った。妻の哀しみが伝わってきた。」と書いている。

この句は昭和二十三年の作で句集『咀嚼音』に収められている。兄爽一が亡くなったのはこの年の八月二十五日で、それから一週間後の初七日の夜であるから、暦の上では秋で、句集にはこの句の前後に「露」「秋虹」などの季語などの句も並べられているので完全に登四郎は秋の句として作っているようだ。

船笛に異郷の響き明易し

山の湯に雨後の新緑なだれけり

茅の輪より海の彼方の富士拝む

父の日の妻子を馱へ送る役

消しゴムで消せる嘘なり冷奴

山家かな梁に乾びし蝮吊る

青簾上げて真鯉を捌きをり

喜寿前後の登四郎先生は各社の俳句総合誌に次々と句を発表し、俳句の勢いの波に乗っている感じであった。〈蠅叩く〉には手ごろなる俳誌ありはそんな時の句である。恥ずかしながら小誌を持っていてる私には衝撃的な句であるが、私の俳誌は薄くて蠅を叩くには役に立つまいと思ったり、それでは端から問題にされないことと同じだと思ったりする。

考えてみれば、大体の結社誌が発行される月初めには、先生の手元に一日に十数冊届き三、四日もたてば山のようになったことであろう。いちいち細かく丁寧に読む時間は無かったと言っても過言ではない。さすれば私のような小誌は、井の中の蛙」を良しとして、会員達の憩いの場であっても良いと思うが、やはり一人でも多く趣味の世界を超えて、俳句の世界へ泳ぎ出す人材を生みたいと思うのである。

蒼茫集

夏来る

甲州千草

* 新緑に眼をつむりみて鳥心地
包丁を使はぬサラダ夏来る

父の日の切れ味を見る指の腹
地境を越ゆ十薬の茎の赤
夕立の大ふところの石屋の石
緑濃悼・仲里貞義様き山の餅となりて来よ

鑄型

細川洋子

そら豆をぷつくりと茹で身籠り子
万緑や手足巨きなアダム像
空蟬の不死の鑄型が落ちてゐる
螢火の闇脈打てりうねりをり
宝玉の芯のくれなゐ朴の花
* 噴水の類型壊す風ありし

金 銀

辻美奈子

シヤンパンの泡の金銀新樹の夜
* 打水の中を空気の立ち上がる
神域も墓地も地続き額の花
朴散華勇氣穢るること勿れ
駆け上がる馬身波打つ芒種かな
浅間嶺の溶岩を流るる夏の霧

声変はり

栗原公子

* 波音も風もやはらか更衣
声変はりせし子の無口青胡桃
蛩の夜伝言どこで違へしや
聴き役に徹す新茶を汲み分けて
走り梅雨使ひ勝手のよき小鍋
力抜くことも知恵なり古茶新茶

小 満

大沢美智子

* 小満や瑠璃を放てる鳩の首
風薫る昭和の貌の路線バス
朝刊を手に梅雨入りのランドリー
入梅いわし生姜たつぶり炊き上ぐる
築守の掌に若鮎の謔しやかなり
艚をひそめ葉を掠めては蓮見舟

楽 々

町山公孝

* 八十の壁を楽々越して夏至
青梅に紅差しそむる登四郎忌
能弁を制す沈黙濃あぢさゐ
紫陽花や時が止まつてゐる小径
冗談に託す本音やサン格拉斯
岩寿司の盛り塩締まる走り梅雨

時の化石

菅原健一

蛙

中村重幸

*かたつむり時間のかたち背負ひゆく
裏返るくらげ時空をかたむけて
棄てられしブリキの玩具沖繩忌
牡丹崩る崩るる音にまた崩る
はんざきや時の化石のごとく棲み

マロニエの花の真上のパリの空
*さみだれの海さみだれの河を呑む
鈍行の蛙の駅に着きにけり
花は葉に人は戻れぬ日を重ね
B面の暮しに慣れて梅雨に入る

初めは白

清水佑実子

濡れ手

七田文子

*創作の初めは白や朴の花
祝宴に笑まふ遺影やみどりさす
俳縁は傍目に奇妙冷酒
花藻ゆれ川燈台の結の地
来し方の捨てし夢ふと大夏野

青鷺の一本足の沈思かな
阿弥陀ともマリアさまとも水芭蕉
蛭袋うすむらさきは思慕の色
若い衆の四肢は発条なり夏つばめ
*濡れ手では触るるな烏瓜の花

紅絹

平松うさぎ

走り梅雨

兵藤惠

遠鳴りに傾るる越の青田波
黒南風の雲の量感富士を圧す
*花魁は紅絹ひるがへし金魚王
更衣縹の布の浅きしほ
白桃の眠り覚まさぬやうに剥く

発車まで間のある茅花流しかな
泉より手足の長き少女来る
ほんたうのことは笑つてレース編む
書架跡の畳の青し走り梅雨
*吹くやうにくちびる乗せんラムネ瓶

幽明の際

須賀ゆかり

革命

澤田英紀

幽明の際を夜風や新能
*更衣余生にいらぬものの数
水音の昇りくる谷新樹光
五箇山の夏雲太し山に湧く
炎昼を掻き混ぜてゐる交差点

重力の容となりて滴れり
劇中の台詞請んじ明易し
星涼し無糖コーヒー香り立ち
キツチンカー開いて丸の内薄暑
*革命を叫び合ふごと夏蛙

遙かなる

川高郷之助

若葉

小坂尚子

目の前に見てみて滝の遙かなる
一村のおほよそ映し田水張る
安寧な地表のありて蟻の列
*楽観論ばかりが集ひ初鯉
更衣生きて来たただけ物ありて

光堂若葉の中に沈みをり
麦笛を鳴らさぬ父や桜桃忌
*紫陽花の雫にふれてゆく棺
階に雨を弾きて青蜥蜴
桐咲いて高きところに風の音

飛鷹選評



能村 研三

辞書裏に母の旧姓花は葉に 福田 肇

俳句を作る人にとって国語辞典は必須。いつも身近に置いて解らない字や意味の解らないものを調べる。最新の辞書を買いつけることもなく、母親が使っていたものを今でも愛用している。おそらくは半世紀近く愛用しているもので、辞書の裏には母がまだ独身であった頃の旧姓が記されていた。愛しい辞書を通じて今でも母と意志を通わせておられるのだろう。

万緑や水平線は弧をおびて 河野 智子

水平線という真つすぐな一直線を思い浮かべるが、太平洋のような大きな海の水平線では地球が丸いので、うっすらと弧を描いているようにも見える。高いところから遠くを望むと、鬱蒼とした万緑の地平も緑が伸びた分だけ青い大きな弧が描かれて見えた。

晩学は飽くなき遊び踊子草 山岡 純子

第二の人生に新しいことを始めることは、それが上達するかどうかは別問題として、楽しいことである。気持ちの赴くまま何にでも手を出し、努力してみる。これこそが飽くなき遊びである。踊子草は、花のかたちが笠を被っ

て踊るように見えるのでこの名がある。

縄文の森をあまねく緑雨かな 長山 正子

人類が定住を始め村を作り始めた縄文時代に、まるでタイムスリップしたような森である。恵み豊かな自然に包まれた縄文人の暮らしに思いを馳せながら、万象が生命の輝きに包まれる新緑の季節に降る雨の中にいた。

暈深く鎧ひて梅雨を兆す月 枇杷木 愛

月の暈は、月の周りにあらわれる光の輪のことで、月が暈を深く纏うと翌日は雨の場合が多いといわれている。鎧ひての措辞に暈の深さが思われ、雨の季節の到来である。

名指ししてうからへ放る早苗束 柿内 清一

私の句に「肉親へ一直線に早苗投ぐ」という句があるが、この句は、早苗を放る先のうからの一人を名指ししたというところに真実味がある。

一つづつ声かけ結ぶ袋掛 青木 幹晴

林檎や桃や梨などが実をなした頃に袋を掛ける。防虫や日光を遮断して実を太らせるために一つの実、一房の実に心をこめて一つづつの実に声をかけながら行う。

代掻機かすめ飛ぶ鳥したがへて 笠井 令子

昔は牛馬や人間の手で行われた代掻きは今はトラクターや耕運機で土塊を砕き代田にする。その代掻機を追って鳥たちが掠め飛ぶように集まってきた。のどかな田園風景である。

沖作品



能村研三選

竹酔日煌々の夜に姫還る

市川市

福田 肇

* 辞書裏に母の旧姓花は葉に

紫陽花やちひろの描く女の子
反抗期蚩袋に閉ぢ籠り

程好きに毬の寄り合ふ七変化

* 万緑や水平線は弧をおびて

大分

河野 智子

青嵐己に足りぬ直向きさ

畦塗も機械に託す齡かな

梅雨冷や図書室しんと静まれり

がうがうと堰のりこえて五月雨るる

湖望む 天守の窓や藤の風

藍色のワイングラスを手に夏来

窯元に煙ひとすぢ柿若葉

ワルツ弾く十指かるやか風五月

* 晩学は飽くなき遊び踊子草

* 縄文の森をあまねく緑雨かな

千葉

長山 正子

席讓る少年の礼風光る

表札に歴史の重み濃紫陽花

しんがりに闇夜の迫る蚩狩

山路来て肌身に優し初夏の風

大王松日がな闇抱き走り梅雨

* 暈深く鎧ひて梅雨を兆す月

静岡

枇杷木 愛

氷菓舐め政見を聞く埒にあり

深々と串飲む岩魚焼かれをり

滝壺の音に人語を奪はるる

梅雨の午後わたり廊下の素振り音

噴水の割れて飛び立つ鳩の群

* 名指ししてうからへ放る早苗束

腰に蚊火つけあふ畑の夫婦かな

捨て畑や茂る茶の木の人寄せず

柿内 清一